

30 300
② 100.

徳島県のカマキリ方言について

- (I) 概観・その他 1
- (II) 分布・語系・語彙の考察 2
- (III) ま と め 23
- (IV) 「カマキリ」の卵 27



森 重 幸

87
6)
45
最



22092

22092

國立國語研究所

は し が き

本稿は、県教育委員会の長期研究生（昭和36年度）として、徳島県の方言調査に従事したさいにまとめた中間報告である。

本県の方言研究については、金沢氏をはじめ先学諸氏の有益な成果があるが、この中間報告も、これらの成果に導かれ、その基礎にたつて概観したところみである。

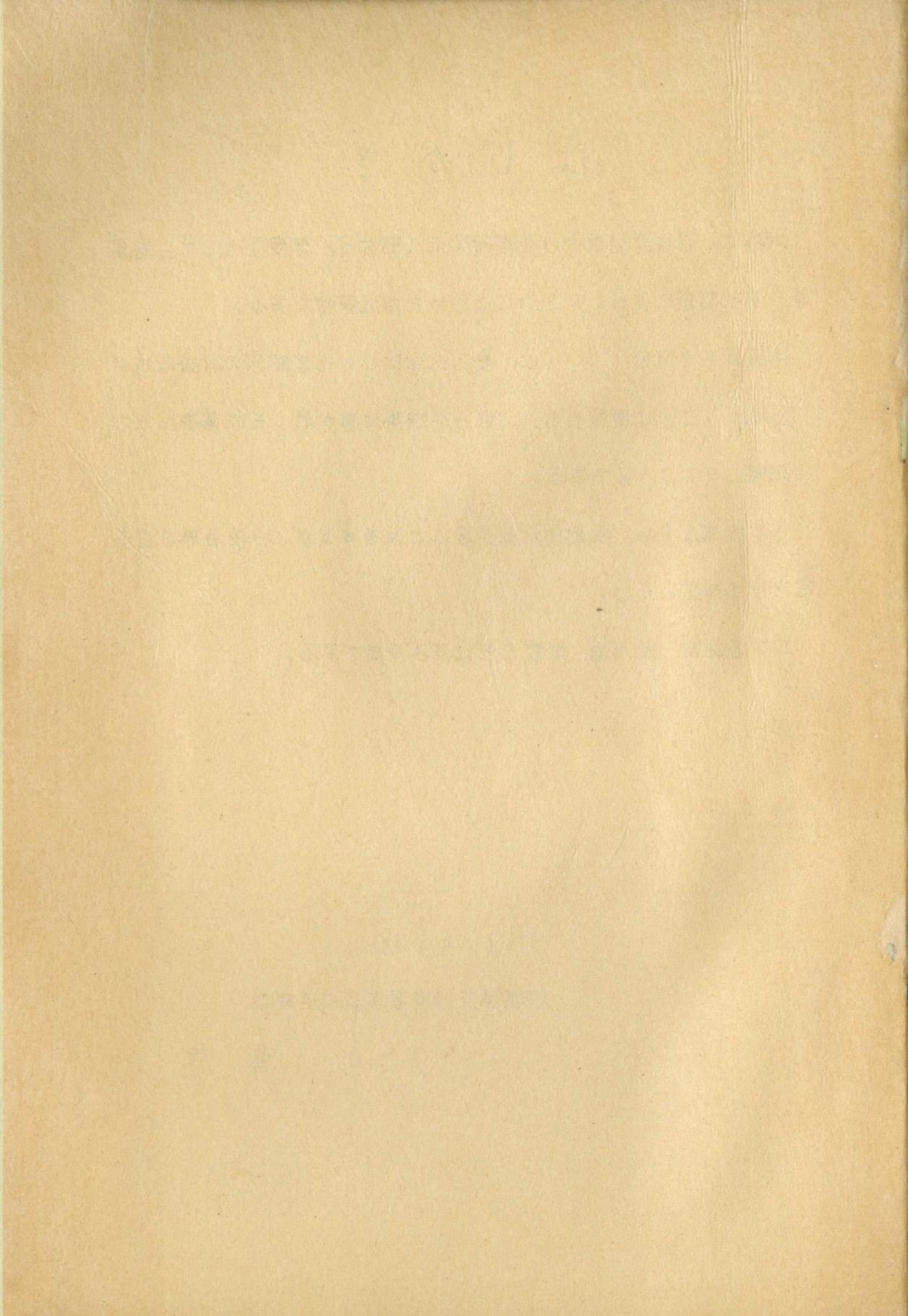
浅学未熟なため、独断的な面が多いと反省するが、今後各界の指導をうけて補正したい。

以下各品詞、表現論、語彙などに及ぶ予定である。

1962.6.30

徳島県立城東高等学校校定時制

森 重 幸



[] 概観・その他

1 「カマキリ」の方言は全国的にきわめて多く、従来いろいろな立場から考察されてきた。

とくに、徳川氏等による「系魚川調査」は、貴重な成果と興味のあるヒントをしめしている。

註 国立国語研究所論集Ⅰ

2 本県においても、森本氏・金沢氏等によってすでに多数の語彙が記録され、報告されていることは周知のとおりである。

註1 阿波方言集

註2 阿波言葉の辞典

3 したがって、これらカマキリ方言の分布状況を精査し、各語彙の成立さらに各語系間の相互関係を追究することが今後の課題といえよう。

4 本稿は、先学諸氏の成果に導かれながら、前記の諸問題について考察した試論であり、中間報告である。

5 調査方法は、県下の高校生160人に依頼して各出身町村の概況を知り、これと並行に、在地年輩層を対象とする現地調査を行った。

とくに、山地帯は方言語彙が多いことを予想し、おもな部落を網羅するよりつとめたが、今後も漸次補っていく予定である。

6 現在までに判明した語系・語彙をしめすと、大体つぎのようである。

註 表1、分布区適宜参照

[表1]

	語系	おもな語彙	分布図
1	カマ	カマキリ、ガンギリ、カマカケ、カマンマ、チョーナカタギ	1・2
2	イボジリ	イボジリ、エボジリ、ヨボジリ、エンボジリ、ヘンボジリ、...	1・3
3	トーロー	トーロー、オガメトーロー、カマカケトーロー、...	1・4
4	オガメ	オガメ、オガメニャトーサン、オガミタビ、オガムボシ、...	1・5
5	エンマ	エンマ、ヤンマ、...	1・6
6	ホトケ	ホトケムシ、ホトケンマ	1・7

7	その他	ゲンベー・テンジンサン ……	1・4
---	-----	----------------	-----

これらについて順次考察していく。

[II] 分布・語系・語彙の考察

(1) 「カマ系」

- 1 「カマ系」には次のようなものがある
 註 表2参照

[表2]

	語 類	語 彙
1	カマキリ	カマキリ、カマキチ、カマキリジ(サン)、カマキリトロー、カマキリホトケ カミキリ、カマウチ、ガンギリ
2	カマカケ	カマカケ、カマカケジ、カマカケテ、カマカケダギ、カマカケトロー、 カマトロー
3	カマンマ	カマンマ、カガンマ、ガガンマ
4	チョーナカダギ	チョーナカダギ

(1) カマキリ類

1 カマキリは程度の差はあるが、地域・年令・階層のいずれをとわず全県的に通用する。共通語的なこの語彙は強い力で一般化している。

2 とくに、徳島市・鳴門市・小松島市などを中心とする東部平地帯には、在地の「カマキリ方言」がまったくない。

3 分布区から明らかなように、新勢力はまず都市部に定着し、吉野川よりの地方で「ホトケンマ」を圧倒して西進し、那賀川よりの南部で「エンマ」の地区に進入しはじめている。

4 進入者「カマキリ」と在地方言との語彙闘争の結果、カマキリトロー <三好郡山城谷>・カマキリホトケ <勝浦郡福原(百疇) (補)>などのオンタミネーションがみられる。

5 また、「カマキリ」自体にも若干の変化があるのは語りまでもない。カマキリジ(サン) <三好郡東祖谷山(久保) (補)・那賀郡沢谷(川成)>

④>やカマキチ<名西郡・鬼籠野<青井天>④・美馬郡江原<冬畑>④>などは、親しみやすい擬人表現である。

6 カマウチ<阿南市畷町④>も新田地方にあるので「カマキリ」の定着過程に作られた新語であろう。しかし、カマダテ<麻植郡山瀬<山崎>④>は、「カマカケ類」<後記する>に属するのではなからうか。

7 さらに、カミキリ<板野郡堀江<大代>④>のような逆行同化的語形変化もあるが、かみきり虫と同音衝突する可能性もある。

8 なお、金沢氏によれば、祖谷地方でガキリが使用されるようである。

註 阿波言葉の辞典

(2) 「カマカケ類」

1 三好郡西部地方を中心に、中央山地帯に散在している。

2 カマカケは、三好郡三縄・山城谷などに小分布層を形成し、複合形カマカケトローを派生している。

カマトロー<三好郡山城谷④>は、「カマキリトロー」・「カマカケトロー」のいずれにも共通した簡略化である。

また、カマカケジ<美馬郡八千代<猿飼>④>は親しみのある擬人表現となっている。

3 カマカタギも、三好郡三名・西祖谷・山城谷などに小分布層を形成するほか、那賀郡木原<平>でも使用する。

カマカッギ<三好郡屋向④>・チョーナカタギ<那賀郡沢谷<岩倉>>なども同じ発想によっている。

4 ところで、カマカケ類がカマキリ類からの単なる語形変化なのか、あるいは、共通語的な「カマキリ」の進入以前に先行してたくもしくは他の語系から派生した古い語系なのかは「カマキリ方言」の全体系に關係する重要な問題点である。

これについては後記する。

註1 (2) 「イボジリ系」・8～11 参照

註2 (4) 「オガメ系」・9～17 参照

(3) 「カマンマ類」

1 カマンマ<美馬郡江原<御所野>④>の語構成は、左地方言の分布相から次の二つが考えられる。

1) (カマ系) + (ホトケンマ) → カマンマ

(5)

(1) 「イボジリ類」

1 那賀郡木頭、中木頭、平谷、坂州、沢谷などに分布する。
ただし、坂州、沢谷などでは「ヨボジリ類」の使用が主となっている。

中木頭(海川)・平谷などでも「エボジリ類」の使用が比較的多い。

2 同一地点で、イボジリ・イモジリ・イボジ・イモジなどが無差別に使用される傾向は、語意がくすれて語形変化をいっその促進し、同時に使用度が低下する一要素にもなっている。

3. そして、木頭(出原)・平谷(平谷)・坂州(坂州)などの中心聚落地は、「イボジリ系」の全語類を通じて使用度がさきめて低い。

また、木頭(平)・沢谷(岩倉)などの最奥地に「イボジリ系」のないことは検討されねばならない。

(2) 「エボジリ類」

1 「イボジリ類」の音変化である。前記地方に広く分布するが使用度が低い。

とくに、那賀郡中木頭(海川)・平谷などでは、エボジリ・エボジ・エボジ(リ)のキンタマなどが「カマキリの卵」の名称と混同して用いられている。

このような傾向はベボジ<勝浦郡福原(八重地・田野々)⑧>についても同様である。

方言語彙が変化し埋没していく過程がうかがえて興味深い。

2 その他、那賀郡宮浜では、(奥)エボジ・(東尾)エボジリなどが少用されている。

また、(川俣・谷山)などでも古老がエボジリを伝えている。

しかし、(小浜・桜谷・古尾)などの国道沿線周辺の聚落地では使用されない。

3 さらに海部郡川上(榎木屋)の古老がエボジリを伝えているのは注目される。前記の勝浦郡福原の場合と同じく海部川流域にもイボジリ系の分布していたことは確実である。

(3) 「ヨボジリ類」

1 那賀郡坂州・沢谷などに分布するだけである。

2 ちなみに当地方では、いぼを**ヨボ**と発音することは前記した。

註 (2)「イボヅリ系」・5参照

(4)「エンボヅリ類」

1 三好郡東祖谷山・西祖谷山・三名・佐馬地・三繩・箸蔵の一部などに分布している。

2 エンボヅリ・エンボージリが一般的であるが、音の脱落・擬人化などによる語形変化も多い。

つぎのよきなものがある。

イ) エンボージ 東祖谷山(西山・今井)・西祖谷山(小祖谷)

ロ) エンボオジ 東祖谷山(中上・久保)

ハ) オンボオジ 東祖谷山(中上)

ニ) エンボーズ 佐馬地(馬地・上野呂内)

ホ) エンボー 箸蔵(下野呂内)

3 このよきな音変化や擬人的表現は、カマキリの卵が老人の陰囊に酷似して、オジフグリ・ジューのキンタマなどと呼ばれることとも関係がある。

4 注目されることは三繩・佐馬地・山城谷などで、「エンボヅリ類」がカマキリの卵の名称に転化しており、さらに、三繩・佐馬地などの平地聚落地では、この転化名称さえ埋没しかけている点である。

5 このような傾向は、平地帯が外部と接触しやすいことにもよるが、さらに他の要素が作用していることは、交通不便な山城谷山此の現象から考えてもあきらかである。

これについては後記する。

註 (4)「オガメ系」・9~17

6 また、「エンボヅリ類」の衰退が山地の中心聚塔(東祖谷山(京上)・西祖谷山(棟注))などでもめだっている。

(5)「ヘンボヅリ類」

1 東祖谷山(茗谷・榎尾)・三名(平)などで使用している。これについては前記した。

註 (2)「イボヅリ系」・6参照

2 東祖谷山(京上)・三名(平)などではヘンボーのように省略されて用いる場合もある。

8 ところで、分布図の上で不審に思われるのは、那賀郡木戸(平)、天谷(岩倉)、三好郡三名、山城谷(栗山、平野)など、本県の最奥地がイボジリ系でなく、カマ系とウ点である。つまり、カマキリ類以前に、いわゆる古いカマ系があったかどうかの問題が提起される。

9 前記したように、三好郡庄馬地・山城谷・三縄などで、「イボジリ系」が「カマキリの卵」に転化していることを考えると、当地方の「カマ系」は、「イボジリ系」の分布層の上に新しく定着した語系といえよう。

10 また、前記(平)・(岩倉)・(川成)などは、村誌や在地古老の語から判断しても、その開拓はあまり古くはないらしいので「イボジリ系」の定着していないことも不自然ではない。

とくに、(岩倉)・(川成)などは、戦時中の配給制実施以前、すべての物資を麻植郡木屋平から購入していたという特殊な地理的事情も考えられる。

11 以上の諸点からこれら「カマカケ類」が「イボジリ系」よりも古くないことは理解できるが、いわゆる「古いカマ系」が「イボジリ系」以後に存在していたかどうかの問題解決が残されてくる。

これについては後記する。

註 (4)「オガメ系」・9~17参照

(5) 「トロー系」

1 「トロー系」には次のようなものがある。

註 表々参照

〔表々〕

	語 類	語 彙
	単 独 型	トロー
	複 合 型	カマカケトロー、カマキリトロー、カマトロー、オガメトロー、オガマトロー。

2 「トロー系」が全体系の中でしめる位置は、分布図からとらえにくい。中央山地帯における分布層が固性的にあらわれないからである。

しかし、本県西部の三好郡山城谷、三名、三縄などにおいて「トロー系」が「イボジリ系」分布層の同近地方と重っており、海部川流域では、「オ

が「オガメ系」の最前端と重って「イボジリ系」(海部郡川上・榎木屋)を圧迫して行った形跡がうかがわれる。

3. 以上のことから、「トーロー系」は「イボジリ系」につぐものとして推定されるが結論は今後のくわしい調査にゆずりたい。

(1) 「単独型」

1. トーロー・トローがあるが、分布の上で個性的なのではなく話の場でどちらにでも発音されている。

2. 中央山地帯に散在しているものは使用度がさわりて低い。

(2) 「複合型」

1. カマ系トーローは三好郡山城谷・三縄などに、オガメトーローは海部川中上流地方に、オガメトローは三好郡山城谷(大谷・茂地)などでそれぞれ使用する。

2. これらの地方では「単独型」も使用するが「複合型」の方が一般的である。そして、年輩層は比較的多用している。

3. 「単独トーロー」の使用度が低く、「複合トーロー」の分布層にしてもわずかに西部と南部に露頭しているにすぎないという現象は、一体なによるのであろうか。

4. これは「トーロー」が漢語であるという特殊性のために在地の入々の美感にとほしく、生き生きとした方言生活に適さなかったことを裏づけているのではなからうか。

つまり、「トーロー系」は他の語系(先行または後続の)と結合して使用されるが、そうでなければ急速に衰退していく運命だったのである。

5. すなわち、「複合型トーロー」が本県の西部と南部とでわずかながらも分布層を形成し得たことと、中央山地帯において「単独型トーロー」が衰退したことは、この特殊性がしめした楯の両面である。

6. にもかかわらず「単独型」が埋没してしまわなかったのは、生活の中で体験する漢語的知識と学校教育などが生命力のわずかな補給源となったのかもわからない。

(4) 「オガメ系」

1. 「オガメ系」は、「カマキリ」が前脚の鎌をかまえる動作を拝むとみた擬人表現である。

「オガメ系」地方の中年層以上の人々は、オガメ・オガメナト・サンなどと言って「カマキリ」を遊びに使った少年時代の記憶を持っている。

2. 「トーロー系」に続いて登場した強力な語系であることは分布図から推定される。

また、他の語系に比較して分布層の広いことは、この即物的な表現が、方言生活に適していたことを意味している。

したがって語彙も多いが、一応つぎのようにまとめてみた。

注 表5参照

[表5]

	語 類	語	彙
1	オガメ	オガメ・オガモ・オガメトロー	
2	オガマ	オガマニヤトーサン・オガマナトーサン・オガマノトーサン・オガマトーサン・オガマノトロー・オガマ・オガシマ	
3	オガミ	オガミタオシ・オガミトーシ・オガミンド・オガミ・オガミムシ	
4	オガンボーシ	オガンボーシ・オガンボ	
5	オガマッテヨ	オガマッテヨ・オガマッシヨ	
6	オガその他	オガムシ・オガ・カガンマ・ガガンマ	

(1) 「オガメ類」

- 1 「カマギリ」に直接要求した表現である。
- 2 オガメは、美馬郡八千代(猿飼)⑩以外はすべて海部郡に分布する。牟岐、由岐では年配層が比較的多用している。
- 3 オガメトローは海部川流域に分布する。当地方では、「オガメ」・「トロー」を別個に使用する場合もあるが、「複合型」が一般的である。中・上流地方の年配層は比較的多用するが、川東・鞆、川西など下流地方の聚着地では、老年層でもほとんど用いない。
- 4 オガモ＜海部郡由岐(木岐)＞は、確定的な「拝もろ」の意にとれるが、「オガメ」の不完全逆行簡化とみることもできる。

(2) 「オガマ類」

- 1 オガマニヤトーサンは、「拝まにゃ通さん」の意で、条件をつけて要求した表現である。

祖谷川、真光川、穴政川、那賀川など、ほとんどの「オガメ系」地方に分布している。

オガマトーサンは、その変化型である。

2. オガマトーサンは、三好郡西祖谷山、三名などで多用されている。オガマトーサンの変化であるが、意味の上では、「拝む」→「お鎌」へ、「通さん」→「父さん」へと実質的な飛躍がある。

3. また、オガマトーサンは前記を簡略化した擬人表現である。

4. さらに、オガマトーサン < 三好郡東祖谷山 (佐野) > は「父さん」→「殿さん」へと類似音による語意展開を起したのである。

5. オガマトーロー < 三好郡山城谷 (茂地) > は、「オガマトーサン」と「トロー」とのゴタミネーションによるものである。

6. オガマは、オガマトーサンの簡略化である。

那賀郡宮浜(妻)、海部郡三岐田(志和岐)、阿部などで使用する。

なお、三好郡昼間 (増川) ⑧は、オガマトーサンの簡略化であろう。

このほか、「オガマ」は「オガメ類」の順行同化によって形成される可能性もある。

7. オガンマはオガマの鼻音化である。那賀郡宮浜(若谷・正木谷)などでは、エンマ (後記する) とともに若い世代も使用している。

また、那賀川水系の海部郡赤河内(原尻)、美馬郡江原(御所野)などで古老がオガンマを伝えていることからみて、その周辺地方にも「オガメ系」の分布していたことがわかる。

(5) 「オガミ類」

1. 「オガミ類」の使用度は、いずれもきわめて低く、他の語類から局地的に派生したものとおもわれる。

2. オガミ < 三好郡東祖谷山 (高野・和田) ⑩ >・オガミムシ < 美馬郡一宇 (猿貝類) ⑪ >などは、それぞれ在地老年層が伝えている程度である。

3. オガミタオシ (拝み倒し) ⑫ はなかなか奇抜な表現である。オガミトニシ (拝み通し) ⑬ はその変化型であろう。ともに那賀郡平谷の老年層が伝えている。

この二語は、その表現の性格からみても文字による形成であることがわか

4. オガミンド < 海部郡茂川 (伊勢田) ⑭ > はオガミトニシの簡略化ではなからうか。あるいは「タニゴ」(谷)、「アリンゴ」(蟻)などに通

する接尾語的要素かも知れない。

(4) 「オガンボーシ類」

1 オガンボーシは美馬郡一宇で多用するほか、三好郡東祖谷山(久保・菅庄)・麻植郡木屋平(太合・川上)などで少用している。

2 一般的には拝み法師と意識されているが、その語構成には若干のあり方が考えられよう。

イ) (オガマナトーサン) } → オガンボーシ
(オガミムシ)

ロ) (オガマナトーサン) → (オガミムシ) → オガンボーシ

ハ) (オガミ) → (オガンボ) → オガンボーシ

ニ) (オガメ系) + (イボジリ系) → (オガンボ) → オガンボーシ

ホ) (オガメ系) + (イボジリ系) → オガンボーシ

3 イ)は、拝むという意識から直ちに法師を連想して、「オガンボーシ」を形成するという過程である。

このような推定は可能であるが、分布層を十分考慮していないところに主観的すぎる欠陥もある。

というのは、この推定が可能ならば、他の「オガメ系」の地方にも同様に「オガンボーシ類」の形成される可能性があるはずである。

「オガンボーシ類」の分布層が限定されているのは、やはり、それを形成する必然的な要素があったのであろう。

4 ロ)の形成は、拝むという意識を順次連想して擬人化の方向をたどったものである。

「オガミムシ」の使用度がきわめて稀なことも後続の「オガンボーシ」に圧倒されるとみるならば、この形成過程は十分に理解される。

しかし、前記したように、「オガメ系」の中から「オガミ類」の派生する場合は他の地方でもきわめて少ないことを考えると、このような過程で「オガンボーシ」が形成されたかどうかともまた疑問となる。

5 ハ)は、まず「オガンボ」(拝み坊)を連想し、さらに「オガンボーシ」を連想するのである。

本県では、つくしの名称がつくしんぼりでありつくつくぼりしなどであることを考えると、まったく不可能な連想ではない。

しかし、「オガンボ」と「オガンボーシ」とが本県の南北に、しかもきわめて離れた地点に分布することは、この推定に無理があることをしめしてい

る。

6. ②は、「オガヌ系」と、これに先行する「イボヅリ系」どのコンタミネーションである。

那賀郡宮浜では、「オガマ」・「オガンマ」・「エボヅリ」・「エボジ」などが共存していることから、(谷山のオガンボは次のような形成とおもわれる。

$(\begin{array}{c} \text{オガマ} \\ \text{オガンマ} \end{array}) + (\begin{array}{c} \text{エボヅリ} \\ \text{エボジ} \end{array}) \rightarrow \text{オガンボ}$

しかし、これから「オガンボシ」を派生しなかったことは、5の考察で明らかである。

7. ①も同じコンタミネーションであるが直接「オガンボシ」を形成する過程である。

$(\text{オガマナトサン}) + (\text{エンボージ}) \rightarrow \text{オガンボシ}$

三好郡東祖谷山(久保、菅生)などに、これら三方言の共存していることは、上記の推定の支えとなる。

8. したがって、美馬郡一宇・麻植郡木屋平(太合・川上)など、「オガマ類」と「オガンボシ類」とが共存する地方は、①のコンタミネーションを逆に裏推して、イボヅリ系(エンボージ)があったとみてよいであろう。

9. 上記の考察から明らかによろしく、「オガンボシ類」は、「オガヌ系」・「オガマ類」・「オガミ類」などと異なり、「オガヌ系」から二次的に派生した方言である。

(5) 「オガマッチョ類」

1. オガマッチョは三好郡東祖谷山(高野・和田)などで、おもに少年が使用する。

2. オガマッショも三好郡西祖谷山(徳善、西岡)などで、やはり少年層が使用している。

3. 両地点は、それぞれ祖谷川・吉野川の右岸にあって、かなり遠距離である。くわしい調査によって分佈層をたしかめる必要がある。

4. その語構成は、オガヌ系と蝶とのコンタミネーションによるのではなからうか。

ところで、蝶は本県でチヨーチョ・チヨーゴなどである。したがってオガマッチョ・カマカケチョ・カマキリチョなども予想される。

よ 「オガマッコ類」も「オガンボーシ類」と同じく、「オガメ系」の二次的派生方言である。これについて、今後くわしい再調査を予定している。

(6) 「その他」

1 オガムシ < 三好郡 三繩 (影野) >・オガク 海部郡 川上 (寒カ類) > などは、古老の伝えるものである。

2 これらは「オガメ系」の簡略化であるが、本県では、野菜を食害する かめ虫 を オガ といっており混同されやすい。

つまり、極端な簡略化のため本来の語意が失われ、他の虫と同音衝突するという不利な点もあって、結局一般化しなかったのであろう。

3 カガンマ・ガガンマ などについては前記した。

註 (1) 「カマ系」 - (3) 「カマンマ類」 参照



よ 以上、各語類について考察したが、「オガメ系」の分布層を概観するとき興味のある点が二三あげられる。

々 すなわち、「オガメ系」の分布は吉野川水系では各河川の最上流地方に、那賀川水系では中流地方に、そして、海部郡ではいまだに海岸線にとどまっていることである。

本県北部が南部よりも変化の早いことは「イボジリ系」の場合と同じである。

このことは方言一般についても同様で、本県の文化、経済、交通などのすべてが、つねに北部を主軸として展開してきたことによると思われる。

よ また、美馬郡一宇・三好郡東祖谷山 (久保・菅生)・麻植郡木屋平 (太合、川上) などに「オガンボーシ」があるという共通性である。

直接的にはコンタミネーションの様式が同じだったことによるが、間接的には、交通・血縁などの要素があげられる。

よ とくに祖谷地方の交通は、大正九年の祖谷街道 < 北田 - 三繩 (出合) - 西祖谷山 (榛生) - 東祖谷山 (久保) > 開通までは、つぎのような峠越しの交通であった。

1) 水ノ口峠 1118m → 井ノ内谷へ

2) (香橋峠 921m) → 三名へ
(西岡峠 778m)

ハ) 畧合峠 1516m → 棧敷峠 1021m → 三庄へ

ニ) 小島峠 1380m → 一字へ

ホ) 京柱峠 1158m 高知県豊永へ

ヘ) 見ノ越し 1470m 麻植郡木屋平へ

そして、藩政以来、小島峠が主幹線であり、行政面でも昭和25年まで美馬郡に属していたことは周知のとおりである。

三好郡三庄(平)・井ノ内谷(知行)・三名などにおけるオガメ系の残存は、峠交通の路傍にしろされた痕跡である。

ク) また、麻植郡木屋平の「オガメ系」分布の狭小なことは、後述するホトケンマの強い圧迫によるのであろう。

ク) さらに、北部に「オガメ系」の第二次的派生語「オガンポーシ」が形成されたのに、他の諸地方でこれが形成されなかった理由についても考察せねばならない。

イ) 那賀川中流域の場合

① 当地方の「イボジリ系」は「エボジリ」・「エボジ」であり、北部の「エンボージ」のよくな長音化がなかった。

そのため、コンタミネーションによって別語を派生した。→ オガンボ

② また、「オガマ類」は「オガマ」・「オガンマ」などが多く、「イボジリ系」などのコンタミネーションによって他の語系を派生した。→ エンマ系

ロ) 海部郡の場合

① 当地方は河川が短かいため、後述語系が早く奥地まで進入しやすく、語彙競争がさびしかつた。そのため、「イボジリ系」は海部川上流をのぞいて早く消失したらしく、「オガメ系」は他の語系と結合した。→ オガメトニ

② また、「オガメ類」は語彙が短かく、しかも語彙がそのものずばりで変化しなかった。

ハ) 三好郡西祖谷地方の場合

① 当地方の「イボジリ系」は「エンボジリ」が多く、「オガメ系」などのコンタミネーションがしにくかった。

② とくに「オガメ系」はオガマノトーサンに変化した場合が多かった。つまり、拝むという意識が消失したため「オガンポーシ」(拝ん法師)の形成が不可能になり、他の語系を派生した。→ オガマツチヨ・カマカケ類

⇒ 三好郡三名・山城谷・三縄などの場合

① 当地方の「イボヅリ系」は「エンボヅリ」が多かったのだが、何かの理由によってカマキリの御の名称に転化した。

② 「オガメ系」は「オガマトーサン」が多かったようで、これが他の語系を派生した。→ カマカケ類

9 なお、これらについては、あとで図示説明することにし、ここでは「カマカケ類」、つまり、いわゆる「古いカマ系」の問題について考察したい。

註1 (5) 「エンマ系」・8~12 参照

註2 (Ⅲ) まとめ・3 参照

10 前記したように、オガマトーサンがオガマトーサンに変化する種何は、三好郡西祖谷山・三名などの「オガメ系」分布層から明らかに理解されるが、この微細な語系変化は、拝まな通さん → お鎌の父さん という、まったく別の概念を派生することになり語意の上では質的变化をもたらしている。

11 また、同地方の吉野川石岸で、オガマトーサンとともにカマカタギの分布する状況から判断すると、お鎌の父さん → 鎌かたぎ という類似概念の連根が展開したよりである。

「カマキリ」が前脚をかまえる動作は、まさに、「鎌をかたぐ」姿であるが、このようなとらえ方も、擬人表現という共通の次元で意識するところに成立する変化である。

12 上記の推定を裏づけるものとして、近接する山城谷の分布層が興味深くとらえられる。

すなわち、カマカケ類の分布層の中に、オガマトーサン（大谷・寺野）オガマトーロー（大谷・茂地）など、いわゆるお鎌の……式方言が点在しており、しかもそれらが古老達に伝えられているという当地の状況は、変化の過程を暗示するものである。

13 なお、オガマトーサン → オガマトーサン と、オガマトーサン → カマカタギ とを比較すると、前者がわずかな語形変化によって語意が大きく変化したのに対し、後者はわずかな語意変化によって大きな語形変化をもたらされた点で対照的である。

14 さらに、即物的な擬人表現カマカタギにも、一つの矛盾のあったことが分布層から直観できる。

すなわち、西祖谷山・三名・山城谷（栗山・平野・寺野）など、上流地方のカマカタギに接して、山城谷（大野・川口）・三縄などの下流地方にカマカケ方言の分布することである。

15 「カマカケ」は「カマカタギ」の簡略化による語理変化とも思われるが、かたぐこととかけることとの語意にはかなりな差がありすぎはしないだろうか。

つまり、「カマカケ」は、「カマキリ」が他の虫を捕獲する習性にいっそうふさわしく表現しなおしたものであり、同時に、人もまた斧・まさかり以外の刃物を普通の場合にはかつがない＝かたがない（で手に持つか腰にさす）という動作に適合させた擬人化なのである。

16 以上の考察から冊らかなように、「カマカケ類」は本県に属するかぎり、共通語的な「カマキリ類」とは無関係に、局地的に形成されたいわゆる「古いカマ系」と判断したい。

そして各地に分散する「カマカタギ」・「チョーナカタギ」・「カマタテ」なども、同様な構成によると思われるのである。

孤立しているように思われる木頭（平）の「カマカタギ」の解釈も、当地が祖谷地方からの移住開拓による伝説はともかく、なんらかの形で「オガメ系」地方（たとえば、麻植郡木屋平・美馬郡一宇・三好郡祖谷山地方）との接触があったのであろう。

17 なお、三好郡西部地方で「イボヅリ系」が「カマキリの類」に語意転化したことは、当地方の「カマカケ類」その他に起因すると前記したが、近接の三好郡佐馬地・箸蔵などにおける「イボヅリ系」の状況を逆に類推して、当地方にもカマカケ類の存在したことを推定しえる。

18 さらに、西部地方にカマキリ類が比較的早く一般化した事実も、カマカケ類の分布層の上に、類似的なカマキリ類が容易に定着したという特殊な理由によるのであろう。

19 最後に、海部郡三岐田、阿部などの「オガメ系」が孤立しているのは、後続する「エンマ系」・「ホトケ系」などが土佐街道沿線に分布し、海部郡赤河内（大戸・山河内・西河内）から牟岐（橋）にまで及んでいるためである。

語彙の移動する経路が印象的であるばかりでなく、新語系発生の手がかりがしめされていて興味深い。

(5) 「エンマ系」

1 「エンマ系」は「トーロー系」と同じく語彙の少ないのが特徴である。つぎのよきなものがあるが、一括して考察していく。

[表 6]

	語 類	語	彙
1	エンマ	エンマ・エンマサン・エンマハン・エンマノトーサン	
2	ヤンマ	ヤンマ	

2 「エンマ類」には、エンマ・エンマサン・エンマハンなどがあるが、その場で適当に使用しており、分布の上でそれほど南廻りにはならない。

2 分布層は勝浦川上流・那賀郡東部・海部郡赤河内などの語地方にまたがっている。

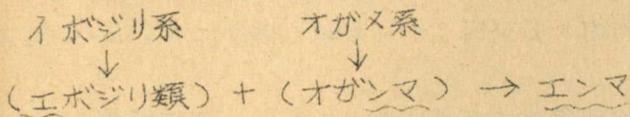
もともと、依頼調査によれば東北地方にも少用されるらしい報告が若干あったが、現地調査の結果はいずれも否定的で、結局確認できなかった。

3 したがって、県南よりに密集した特徴的分布の理由も、「エンマ類」の形成過程とともに説明されねばならない。

4 「エンマ類」は、『カマキリ』の怒りやすい性質から「エンマ大王」を連想した命名である。』とする俗信が各地にあるが、これと反対に、海部郡赤河内(白犬・大戸)・那賀郡椿などでは、『仏さん』のお使い。』という俗信もある。

5 このような主観的判断に対し、その語構成に興味のあるヒントをしめしているのは那賀郡宮次である。

すなわち、「エンマ系」・「オガメ系」・「イボジリ系」が共存している当地方の分布相から、つぎの推定が可能になる。



6 つまり、「エンマ系」は、先行する「イボジリ系」と「オガメ系」とのコンタミネーションに「エンマ大王」の連想が結びついたのであろう。

7 「エンマ系」地方におけるもう一つの俗信——「仏の使い」——についても容易に理解できる。

すなわち、「オガメ系」のもつ、拝むという概念が仏を連想させることから、前記の俗信を派生したのであろう。

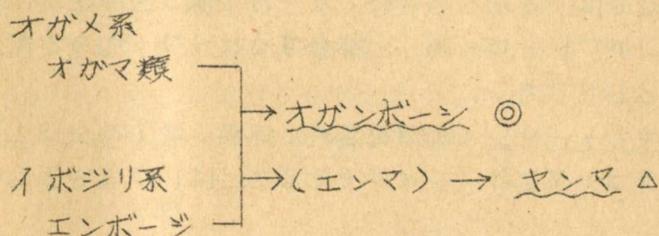
前記の(白沢、大戸)などが「オガメ系」地方に近い「エンマ系」地方にあり、ホトケムシ・ホトケサンなどの方言を衆生していることは、この推定の可能性を裏づけている。

8 また、東北地方で「エンマ系」の分布しない理由も、これと関連して説明できる。

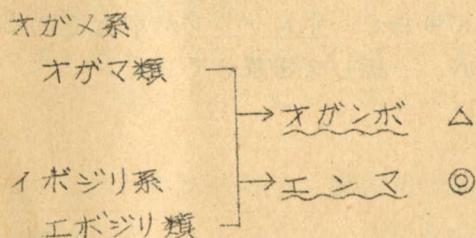
すでに「オガメ系」のところでものべたが、簡単に図示するとつぎのようになる。

註 (4) 「オガメ系」 8 参照

イ) 北部地方の場合



ロ) 那賀川地方の場合



9 つまり両地方は、ともに「オガメ系」の第二次派生語の「オガンボーン類」と、後続する「エンマ系」とを形成したのであるが、那賀川地方では「エンマ系」が、そして北部地方では「オガンボーン類」がそれぞれ勝利を収めたのである。

10 南部地方のオガンボ(那賀郡喜兵(谷山)④)、そして北部地方のヤンマ(美馬郡端山(長瀬)・一宇(広沢)⑦)は、両地方における新語発生の可能性を収めたものであるが、それぞれ「エンマ系」や「オガンボーン類」との語彙競争によってやぶれたのであろう。

南部地方では「オガンボ」が遊地の(谷山)に残存し、北部地方では忘れられた「エンマ」が逆行同化して「ヤンマ」と語形変化しているのも興味深い。

11 このよりに、本県の南と北とで、両者の語彙競争が勝利の星を分けあ

った理由は簡単である。

すなわち、北部地方ではオガンボーンがエンマ系よりも方言生活に、より強くアピールし、南部地方では逆にエンマがオガンボーンよりもアピールしたのである。

語彙の明確さや、その時代の人々にふさわしい即物的表現が、方言生活にいかになきな要素であるかということが理解できる。

12. なお、本県西部地方・海部川地方などに「エンマ系」のないのは、両地方で「オガメ系」と「イボジリ系」とがまったく関係し合わなかったためである。

すなわち、西部地方では「オガメ系」が「カマカケ類」を米生し、海部川地方では「オガメ系」が「トーロー系」と結合するといふ、別の方向をたどったことは前記したとおりである。

13 最後に、エンマノトーサン<那賀郡宮浜(拝宮・奥)の>はエンマとオガメノトーサンとのコンタミネーションであることはいまでもない。

(6) 「ホトケ系」

1 「ホトケ系」も比較的語彙が少なく、ホトケンマが中心である。一応つぎのようにまとめられるが、一括して考察していく。

註 表7参照

[表7]

	語 類	語 彙
1	ホ ト ケ	ホトケムシ・ホトケサン・カマキリホトケ
2	ホトケンマ	ホトケンマ・ホトケンバ

2 分布層の特徴は、北部地方に圧倒的に多く、海部郡に散在するといふことで、南部地方中心の「エンマ系」と対照的である。

3 「ホトケ系」は本県の「カマキリ方言」の体系では最新の語系であるが、すでに共通語的な「カマキリ」が都市部に定着し、放射状に「ホトケ系」地方に進入している。

4 この傾向を分布層からみると、吉野川右岸(とくに南岸)の中心聚落をつらねて西進する力がもっとも強いようである。

交通・文化・経済などが密接な関係にある当地方の状況を物語っている。

5. ところで「ホトケ系」の俗信は好悪いずれも多いが、つぎのようなのが一般的である。

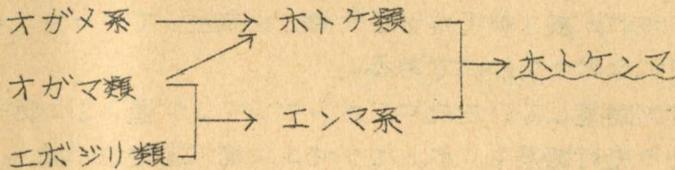
1) 私の俵いだから殺すな。

2) 私の乗る馬だから殺すな。

3) これが墓の近くにいると新しい墓ができる。(つまり、誰かが死ぬ。)

これらは、「ホトケ系」の語構成に直接関係するものではなく、すべて主観的なものである。

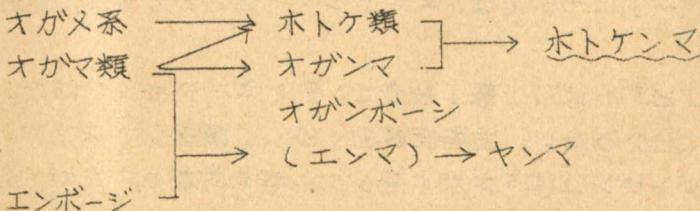
6. それよりも、語構成について興味のあるのは海部郡赤河内、牟岐などである。「オガメ系」地方の中に「エンマ系」・「ホトケ系」が進入している分布相から、つぎの推定が可能となる。



7. すなわち、南部地方のホトケンマは、「オガメ系」の挿述という概念から(白沢・大津)などのホトケサン・ホトケムシなどの「ホトケ類」も派生し、これと、先行する「エンマ系」とがコンタミネーションしたのである。

8. このような形成過程は、勝浦川流域のホトケンマについても成立しえる。当地方に、ホトケンマとエンマが共存していることからの逆推である。

9. しかし、「オガンボーシ」類で考察したように、元来エンマの存在が困難だった吉野川流域では、ホトケンマの形成はどのようだったのであろうか。前記赤河内におけると同様に成立したホトケンマが、エンマを完全に互換してしまつたとみることもしるがそれよりも、分布相から一応次のように推定してみた。



つまり、「オガメ系」自体から、ホトケ類とオガンマが派生し、両者のコンタミネーションによってホトケンマが形成されたとするのである。

10 北部地方におけるオガマの存在は、美馬郡江原(御所野)ー(オガマ)岩倉(平帽子)ー(カガマ)などによっても理解できるし、「ホトケ類」の存在は、板野郡吉野西柿原のホトケムシによって推定し得る。

11 海部郡穴喰(久尾・船津・那佐)などのホトケンマについては上灘地方や高知県の状況を外部からの進入を考えないとすれば本県の北部地方と同じ形成過程だったのではなからうか。というのは当地方に「エンマ系」が存在しないからである。

そして、この前提のもとに「ホトケンマ」形成を逆類推すると、当地方にもオガマ類があったということになってくる。

いずれにしても、くわしい調査によって結論が得られるものと予想している。

12 また、「ホトケ系」が三好郡北田より上流の各地方におよばなかったのは、当地方の「オガメ系」が「カマカケ類」を派生していったため「ホトケンマ」が形成されなかったわけである。

さらに、当地方が隔絶していたため「ホトケンマ」が進入しにくかったこと(実際にはオガメ系などの先行語系も「ホトケンマ」以前に当地方に進入できたのだから、この理由は大した要素ではない。)もあげられるが、それよりも両者の語彙競争が進展しないうちに、共通語的な「カマキリ」の進入する時代となったのであろう。

13 なお、ホトケンバ(勝浦郡(八重地)④)は、ホトケンマの音変化である。

(7) 「その他」

1 前記のいずれの語系にも属さないものは、ゲンベとテンジンサンとである。

海部郡穴喰(塩浜)と浅川(浅川浦)で、ともに下灘地方にある。

2 「ゲンベ」については、『ゲンベー』おがめ番買え通れのような童謡がある。

「オガメ系」と「イボヅリ系」とのコンタミネーションではないかとも思われるが、よくわからない。近接部をくわしく調査してみたい。

3 「テンジンサン」は「オガメ系」から拝む対象の「天神さん」を連想したのであろうか。なおよく考えてみたい。

(Ⅲ) ま と め

徳島県の「カマギリ方言」について概観した女以上の考察をまとめると、大体つぎのようになる。

1 本稿では、便宜上ク語系に分類したが、実さいには「カマ系」に「カマギリ類」と「カマカケ類」の新旧二系をたてるのが正しい。

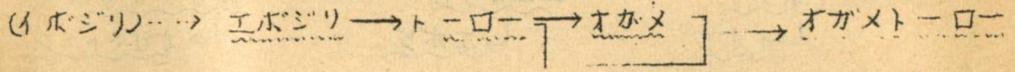
2 「カマンマ類」・「オガンボーシ類」・「オガマツチヨ類」その他など、コンタミネーションによる二次的派生語類もあるが、これを語系別に体系づけると、かえって複雑になる。

したがって、一施8語系とするのが妥当であろう。

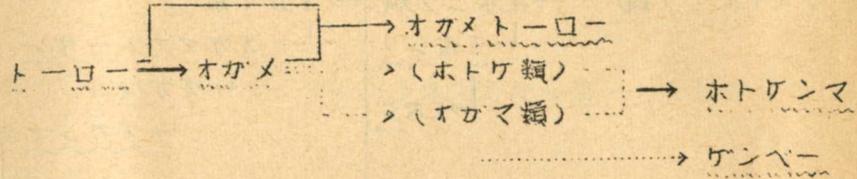
3 各地方における語系の推移を推定できる範囲で記録すると、大体つぎのようになる。

イ) 海部郡

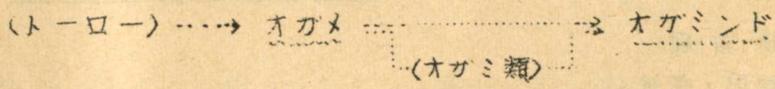
(1) 川上



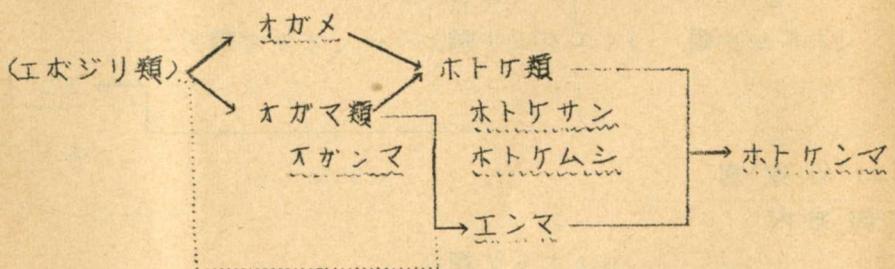
(2) 兵喰



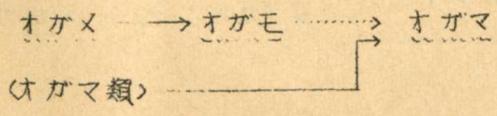
(3) 浅川



(4) 赤河内

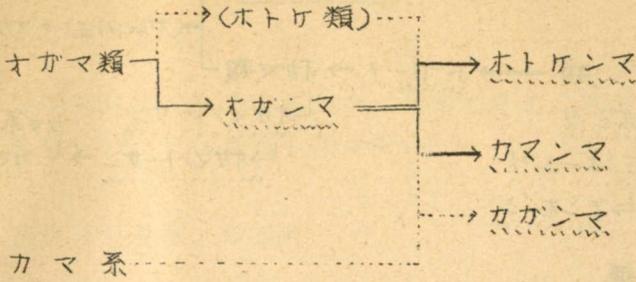


(5) 由岐

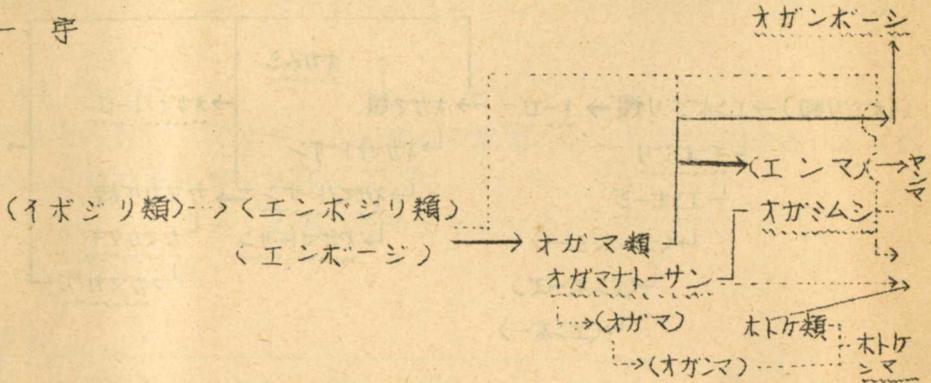


木) 美馬郡

(1) 岩倉・江原



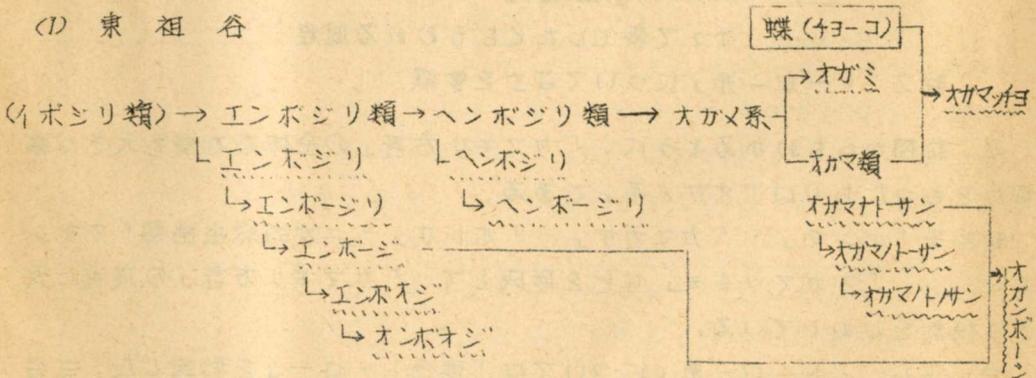
(2) 一守



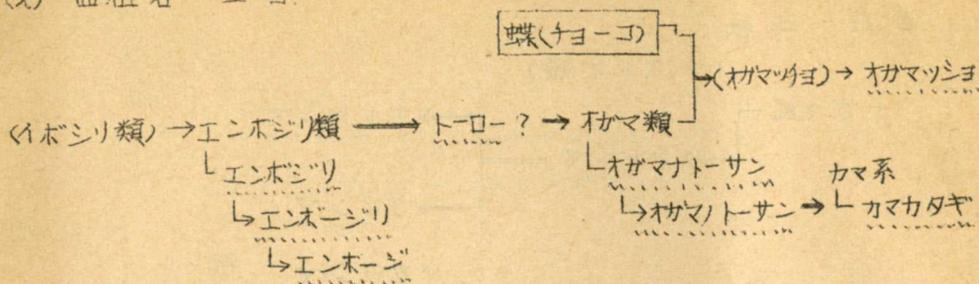
註 美さいには「ホトケンマ」は下流地方から進入したものと見られる。

へ) 三好郡

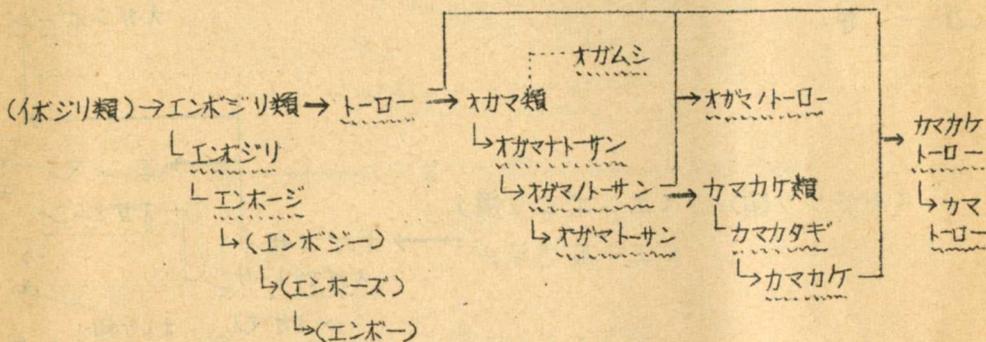
(1) 東祖谷



(2) 西祖谷・三名



(3) 山城谷・三繩



註1 () 実在しないか存在したとおもわれる方言

~~~~~ 実在している方言

—— 変化過程

□ contamination

..... かつて変化したとおもわれる過程

註2 「トーロー系」については5を参照

4 前図からもわかるように、「カマキリ方言」の全体系で最も大きな影響力をもったものは「オカメ系」である。

新語系「エンマ」・「カマカケ」・「ホトリ」・二次的派生語類「オカンホーシ」・「オガマツチヨ」などを形成して、「カマキリ方言」の展開に大きな役割をせしめている。

5 なお、「トーロー系」については「複合トーロー」を形成した、三好郡山城谷・海部郡川上などの系図には記入したが、その他の地方では一応省略した。「オカメ系」に先行するものと思われるが、中央山地での状況はわからないので今後再検討したい。

6 語系の変化過程は、海部郡・那賀郡など、(1)のゆる南方(くみなみかた)

女北方(きたなた)よりも比較的単純で、変化度も遅いようである。

このような傾向は「カマキリ方言」にかぎらず、本県の方言についてかなり一般的のようである。

具体的な理由はよくわからないが、県南と県北との地勢や社会構造の差によるのではなかろうか。後考してみたい。

(IV) 「カマキリの卵」の方言

ノ「カマキリの卵」は「於保知加不久里」として平安時代の文獻にみえている。

註 和名抄

2 本県でもオジフクリをはじめ多くの訛語、および派生語があり、それそれに興味のある分布層を形成している。

3 これをまとめると、大体つぎのようになる。

註 表8参照

(表8)

|   | 語系   | 語彙                                                                                                              |
|---|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ノ | フクリ  | オジヤフクリ・オジフクリ・オジウクリ・オジのフクリ・オジのフنگリ・ジのフクリ・ジのフنگリ・フクリ・オジホクリ・カガンマのフクリ・マツフنگリ・ホクロ                                    |
| 2 | キンタマ | オジのキンタマ・ジのキンタマ・サルのキンタマ・ホトケンマのキンタマ・ヤマノカミのキンタマ・エンボジのキンタマ・ヨボジ(リ)のキンタマ・イボジ(リ)のキンタマ・エボジ(リ)のキンタマ・エンマのキンタマ・キータマ・バーの……? |
| 3 | イボジリ | エンボジリ・エボジ・エンボジ・エンボジー・エンボーズ・エンボンジリ・エボジ・エボジのキンタマ・エンボジのキンタマ・イボジリのキンタマ・ヨボジリのキンタマ                                    |
| 4 | イエ   | ホトケンマのイエ・オカンボシのイエ・カマキリのイエ・エンマウス                                                                                 |

|   |      |                                                                  |
|---|------|------------------------------------------------------------------|
| 5 | ア　　ワ | ホトケンマのアワ・ホトケンマのアオ・オガンホーシ<br>のアオ・カマキリのアワ・カマキリヲアオ・ホトケン<br>マリオバ(ハン) |
| 6 | ヨーダレ | エンマのヨーダレ・ヨーダレクリ・ネフリコ                                             |
| 7 | その他  | ジーのミリスケ・オカマ                                                      |

4 このように多くの語彙があるのは、「カマキリの卵」ななんらかの關心をよびおこさせたからにはかならない。

その一つは、オオジがフクリという古語の特殊な性格によるのである。すなわち、「フクリ」は「陰囊」つまり「黒丸」の意であるから、古語の意味は「祖父の筆丸」ということになる。

前記したように、「カマキリの卵」の形が陰囊に酷似していることから連想して命名した郡物的表現である。

5 この郡物的表現の奇抜な新詠業生の動機の一つとなつたわけである。以下、各語系について考察していく。

#### (1) 「フクリ系」

1 分布図をみると、吉野川北岸山地のシ分布層と県南よりの大分布層とがある。これは従来本県全土「フクリ系」であつたのが、後続の新しい語系によつて分断されたのであらう。(これについては順次分析していく。)

2 オジャフクリ〈三好郡西祖谷(吾橋・有頼)〉は、オオジがフクリの訛語と思われるが、高知県よりの遙地に分布している。

3 オジフクリは、那賀郡木頭・三好郡東祖谷山・西祖谷山など、本県の中央山地に分布している。「フクリ系」の最も代表的なものである。

オジウケリ〈三好郡西祖谷山(徳吉)〉・オジホケリ〈三好郡三名(平)〉などは、その訛語である。

4 また、オジーのフクリ・ジーのフクリなどが、徳島市(多可良・勝新)・海部郡穴喰などに分布している。

那賀郡平地帯および海部郡では、これに「(わ)ジーのフンケリ」のように鼻音化するのが一般的である。

5 そのほか、単独のフクリ〈那賀郡平島・阿南市加茂谷〉がある一方、カガンマのフクリ〈美馬郡岩倉〉・マツフンケリ〈海部郡五河内(白沢)〉・ホクロ〈鳴門市北灘(榎ノ木)〉などの特殊な語彙もみられる。

前記岩倉では「カマキリ方言」なカガシマ、であるから問題ないが、「マツフケリ」・「ホクロ」などは、語意がうすれて他り類似語を連想したことによる変化であろう。

## (2) 「キンタマ系」

1 分布図から明らかなように、「キンタマ系」の分布は「フケリ系」と近接しているのが普通である。

つまり、「フケリ」は陰囊であり單丸であつて同じことだからである。すなわち、オジーのキンタマ・ジーのキンタマなどは、海部川上流・那賀郡東部・勝浦川流域・阿波郡山地などに分布し、その範囲が広い。

3 サルのキンタマく名東郡佐那河内(寺谷)は、分布相からみてオジーのキンタマから連想した類似表現であろう。

4 また、ヤマノカミのキンタマく那賀郡相生(平野)・麻植郡三山(椋野)のような奇抜な表現もある。

同様に、バーの……?のような表現も海部川流域をはじめ「キンタマ系」の各地にあるようだが、その語彙を確認できなかった。

一般には、「ジーのキンタマ・バーの……?」のような短文形式で使用されているようである。

5 さらに、ホトケシマのキンタマく麻植郡中枝(中村)などがある。「カマキリ方言」の「ホトケ系」と結合したものだが、予想に反して使用が少なかった。

これは、「ホトケシマ」の地方が「キンタマ系」よりも「アワ系」が多いためである。

6 さらに、「カマキリ方言」の「エンマ系」と結合した、エンマのキンタマも那賀郡宮浜で少用されている。

7 これに対し、エホジ(リ)のキンタマ・ヨホジ(リ)のキンタマ・イホジ(リ)のキンタマなど、「イホジリ系」との結合は、那賀川上流で比較的多用されている。

当地方のジーのキンタマは、オジーのフケリ→ジーのフケリ→ジーのキンタマのような変化過程だけでなく、「エホジのキンタマ」→「ジーのキンタマ」のように、「イホジリ系」との結合により派生する可能性も十分にあったわけである。

那賀川流域に「キンタマ系」の多いことも、これと考え合せて興味深い。

8 これと反対に、相谷川流域にオジフグリの安定していることも説明されはならない。

つまり、当地方の「イホジリ系」(=エンボジリ類・ヘンボジリ類)は、「エンボージリ・エンボージ」などが多い。

これは、那賀川流域の「イホジリ系」(=イホジリ類・エホジリ類・ヨホジリ類)よりも語形変化が進んでいるが、そのことが、かえつて「エンボ<sup>オ</sup>ジリ」→「オジフグリ」のような連想形式を強化するという一面もあつたようである。

9 最後に単独のキンタマをみると、阿波郡・那賀郡<sup>宮</sup>宮<sup>宮</sup>宮<sup>宮</sup>その他に分布層がある。

10 いずれにしてもキンタマ系は、その表現が直接的であり、使用者にいささか抵抗感を抱かせることはいつまでもない。

その特殊な性格が、新語系系化の大きな動機づけとなつているのはいつまでもない。

### (3) 「イホジリ類」

1 本来、「カマキリ方言」の最も古い語系であるが、三好郡山城谷・三穂・佐馬地などの各地で「カマキリの卵」の方言になつてゐる。

このような語意転化は、これを起こさせたなんらかの原因のあることはもちろんである。

2 前記したように、当地方の「カマキリ方言」は、「オガメ系」より派生した、いわゆる「古いカマ系」(カマカケ類)が圧倒的であつた。

強力な後統語系の登場によつて、「イホジリ系」が語意転化したと推定されるのであるが、さらに、これを促進した別の要素も考えられる。

つまり、当地方の「カマキリの卵」の方言が「キンタマ系」であつたらしいことである。山城谷(茂地)・佐馬地(上野呂内)などの残存「キンタマ」がこれを物語っている。

使用しにくい語彙をさけた結果、「イホジリ系」が転化していつたのである。

3 「カマキリ方言」の「イホジリ系」が「カマキリの卵」に転化する過程は、那賀川地方でも明瞭にとらえることができる。

当地方では、エホシ(リ)のキンタマ・ヨホシ(リ)のキンタマなどのようになつてゐるが、中本頭(海川)・宮<sup>宮</sup>宮<sup>宮</sup>宮<sup>宮</sup>などでは、これらの「イホジリ系」が

カマキリを意味するのカ卵を意味するのカはつきりしない場合が多い。

つまり、「エホジのキンタマ」は一方で「エホジ」を、他方「ジのキンタマ」をと、二つの係方言を形成する方向をもっている。

4 同様な過程が勝浦郡福原のベボジにもあるが、このことについては前記した。

註 (2) 「イホジリ系」(2) 「エホジリ類」・1 参照

#### (4) 「イエ系」

1 ホトケンマのイエ・オガンポーシのイエ・カマキリのイエなどがあるが、いずれも美馬郡一守・八千代などに分布している。

2 「イエ系」は、カタツムリのイエのように使用するのならともかく、「カマキリの卵」に表現するのはいささか不審である。

あるいは、三好郡面師における「イホジリ系」の證蕪転化と同様に、「エンポーシ」などからの派生かとも思われるが確証はない。

3 那賀川中流におけるエンマのスも類似した表現である。

4 これらは、いずれも「キンタマ系」に代る語彙として派生したものである。

#### (5) 「アワ系」

1 「アワ系」の分布の特徴は、県北地方にかぎられることである。

これは、阿波郡・麻植郡などの残存「キンタマ系」の分布相から判断して、北都地方に一般的であった「キンタマ系」に代る新語系として登場したものである。

2 「アワ系」は、「カマキリの卵」が、その産卵初期において、泡状もしくは唾状であるという事から發想された即物的表現である。

3 名面郡・阿波郡などの東部より地方では、ホトケンマのアワであるのに対し、美馬郡以西では、ホトケンマのアオであることが注目される。

4 また、オガンポーシのアオ〈美馬郡一守〉は、オガンポーシのイエを圧迫する傾向のようである。

5 さらに、ホトケンマのオバ〈ハン〉〈美馬郡岩倉〉〈平畑子〉・郡里(寄)・江原(清水)その他〉は「アワ系」からの変化か、「イホジリ系」からの変化かよくわからないが、「ジのフケリ」・「ジのキンタマ」などに類推した擬人表現であることはいうまでもない。

(6) 「ヨーダレ系」

1 「ヨーダレ系」は『「カマキリの卵」を低るか、または黒焼を服用すると、幼児の「ヨダレ(涎)」に効がある』との俗信からの発想である。

2 エンマのヨーダレ <那賀郡宮架・日野谷・相生・延野・鷺敷>・ヨーダレクリ <海部郡三岐田・阿部>などは県南地方に分布している。

3 これに対し、ネアリゴ <阿波郡林・伊予・夕勝・大俣>は県北地方にある。  
3 「キンタマ系」をさける動きが、いろいろな面から試みられていることは興味深い。

(7) 「その他」

1 ジ一のシリスケ <三好郡井ノ内谷(駒倉)・麻植郡川田(笑ノ井)>はどのような形成なのかよくわからない。しかも、これら二地点は、ともにかなりへだたつた山間地帯にあるのをどう解釈すればよいのであろうか。

「ジ一のシリスケ」がイホジリ系に関連するようにも思われるが今後の調査によらばはならない。

2 オガマ <三好郡登野(増川)>の形成は、「オガメ系カマキリ方言」の使用度が低下して、照と混同したことによる。

三好郡西部の「イホジリ系」と類似した語彙転化として興味深い。

(8) 「まとめ」

1 以上、「カマキリの卵」の方言について概観したが、これらの語系・語彙は「フケリ系」を中心に展開したことが理解できる。

2 そして、語系変化を促した最大要素は「フケリ系」にかわる「キンタマ系」の登場であることはいうまでもない。

3 各地でそれぞれつぎのような変化がもたらされたことになる。

イ) 三好郡東祖谷山・西祖谷山

「フケリ系」のみ

ロ) 徳島市多可良・海部郡川上・那賀郡本頭

「フケリ系」→「キンタマ系」

ハ) 三好郡山城谷・三縄・佐馬地

「フケリ系」→「キンタマ系」→「イホジリ系」

- ニ) 阿波郡伊予・那部郡三岐田  
「フクリ系」→「キンタマ系」→「ヨーダレ系」
- ホ) 美馬郡江原・石西郡神山  
「フクリ系」→「キンタマ系」→「アワ系」
- ヘ) 美馬郡一守  
（フクリ系？）→（キンタマ系？）→「イエ系」→「アワ系」
- ト) 那賀郡宮浜  
「フクリ系」→「キンタマ系」→「ヨーダレ系」→「イエ系」

「カマキリ」および「カマキリの卵」の方言について考察したがこのように多くの語彙の使用されてきたことは現代のわれわれにとっては驚異である。しかし過去の時代と社会にとっては必要な關心事として意識されていたことを意味するのであろう。

すなわち昔の少年達にとっては、これらはおもしろい玩具としてもてあやばれたであろうし、大人達にとっては 遊・イホ取り・夜尿・腎臓・結核などの薬用として注目されたという生活必需品だったのである。

現在でも、山間部の年輩層は、その少年時代に「カマキリ」をもてあそんだなつかしい記憶があるし、また、薬用としてこれらを保存している人々も多い。

しかし、社会の進展とともに、「カマキリ」に関する多くの方言と俗信、そしてなつかしい記憶も急速に消滅していくのであろう。

これらをかき消していく姿こそは、共通語的な「カマキリ」の一般化であるが、昔の人々が試みた生活の知恵に代るものか、少年達にも大人達にももたらされねばならない。

平和な遊びのよろこびを少年達に、そして文化的な豊かな生活を大人達にと想うのである。

## あ と が き

「徳島県のカマキリ方言」について概観しようとしたが、十分にまとめることができなかった。

勤務の都合で時間なかがりられたり、未熟なため分前不十分だったりで、統一的に考察しきれなかつたと反省する。

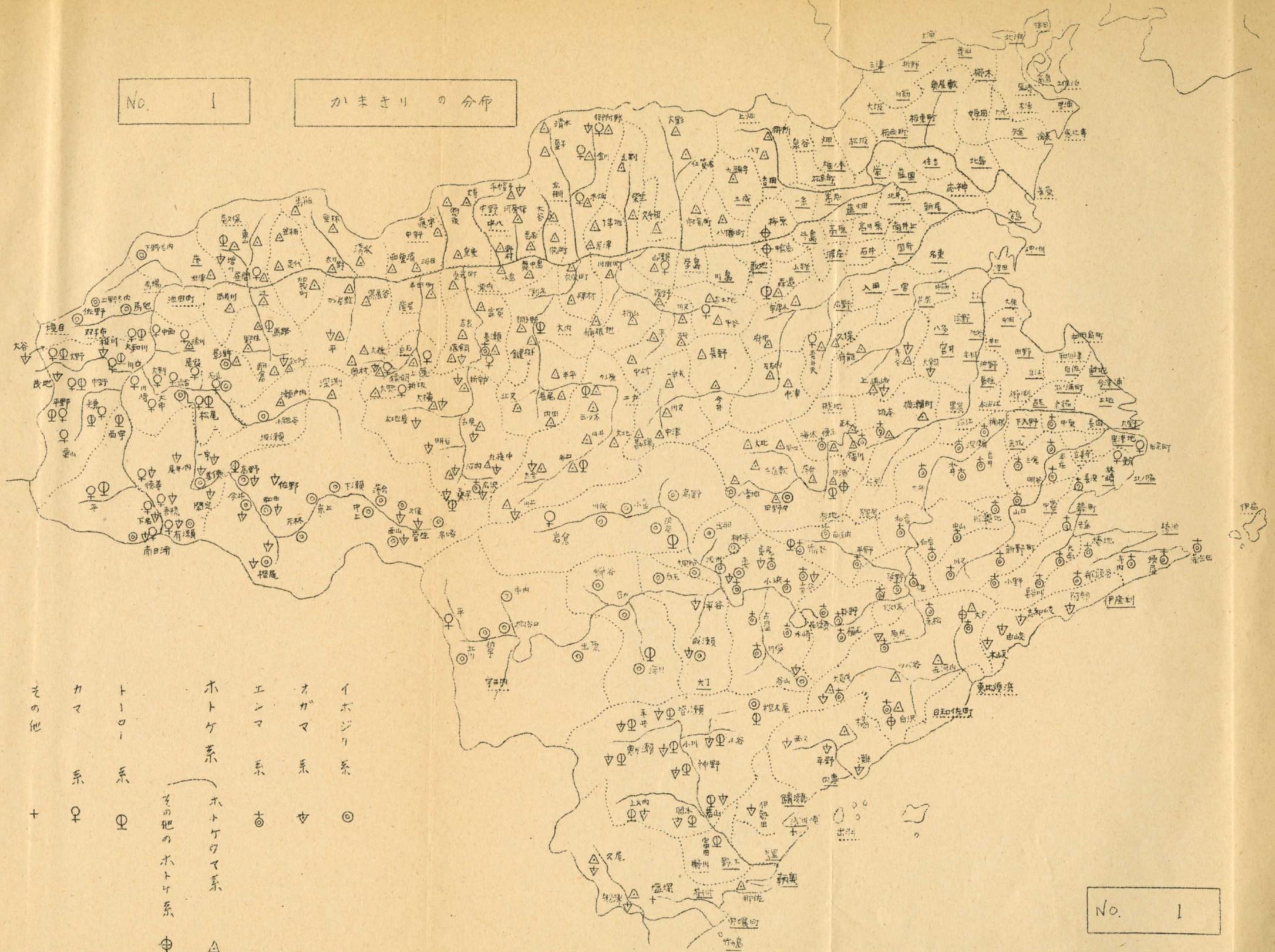
いろいろと不備の点が多いが、先輩ら現地の方言の指導をうけて今後補正していきたい。

この調査にあたり、直接協力してくださった県下の多くの人々、お年寄り、町村役場の方言・先庄方、そして親愛な中学・高校生の方々に心から御礼申し上げます。



No. 1

かまきりの分布



イボジリ系    ⊙

オカマ系    ◐

エンマ系    ⊕

ホトケ系    △

                    ホトケワマ系

                    その他のホトケ系    ⊕

                    トロー系    ⊕

                    カマ系    ♀

                    その他    +

調査予定地点    ……

カマキリの使用

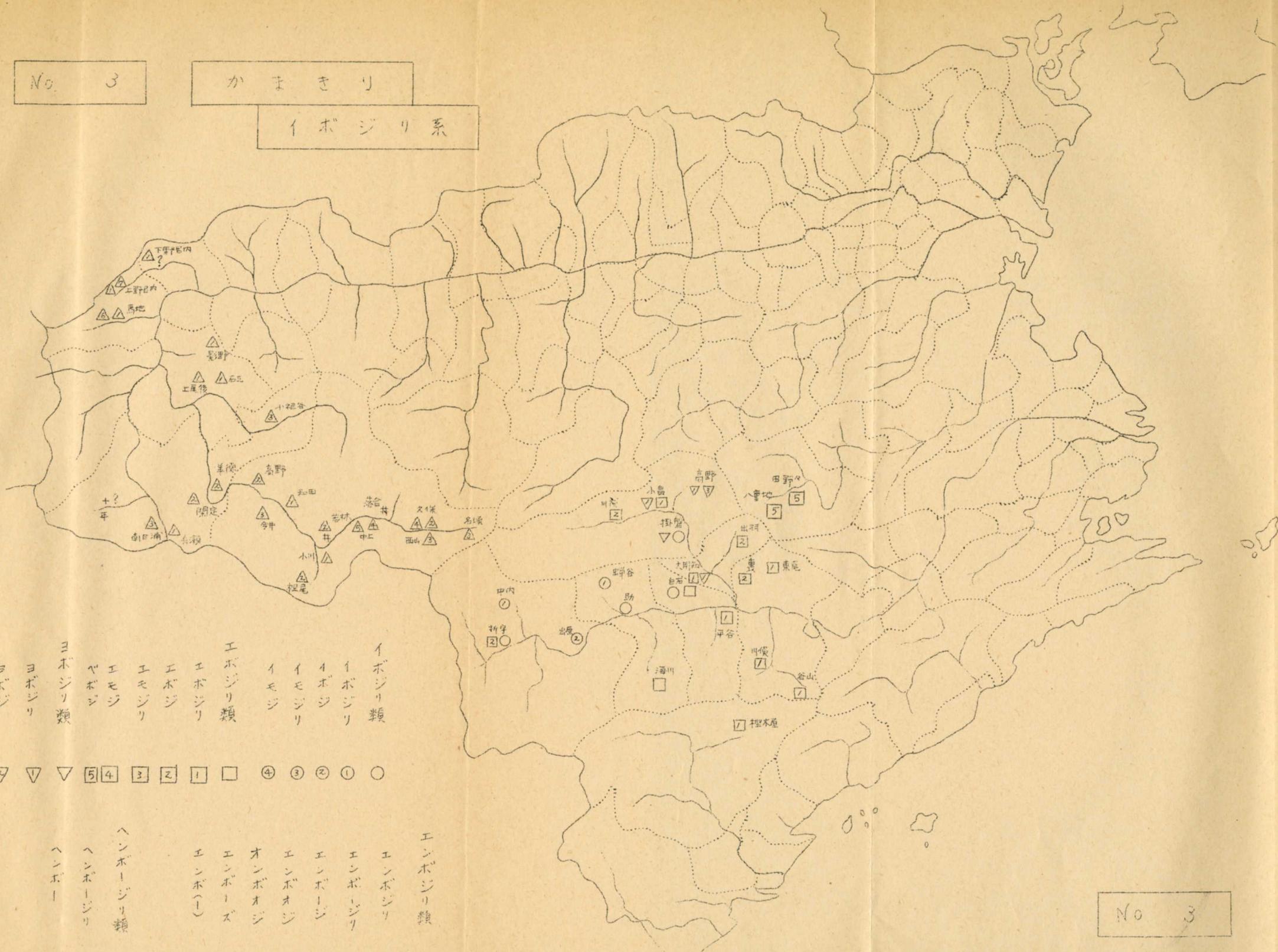
No. 1



No. 3

かまきり

イボジリ系



イボジリ類  
 イボジリ  
 イボジ  
 イモジリ  
 イモジ  
 エボジリ類  
 エボジリ  
 エボジ  
 エモジリ  
 エモジ  
 ヨボジリ類  
 ヨボジリ  
 ヨボジ  
 ヨモジリ  
 ヨモジ

▽ ▽ ▹ ▸ □ ⑤ ④ ③ ② ① ○

エンボジリ類  
 エンボジリ  
 エンボージ  
 エンボオジ  
 オンボオジ  
 エンボーズ  
 エンボ(一)  
 ヘンボ  
 ヘンボー  
 ヘンボージリ  
 ヘンボージリ類

No. 3

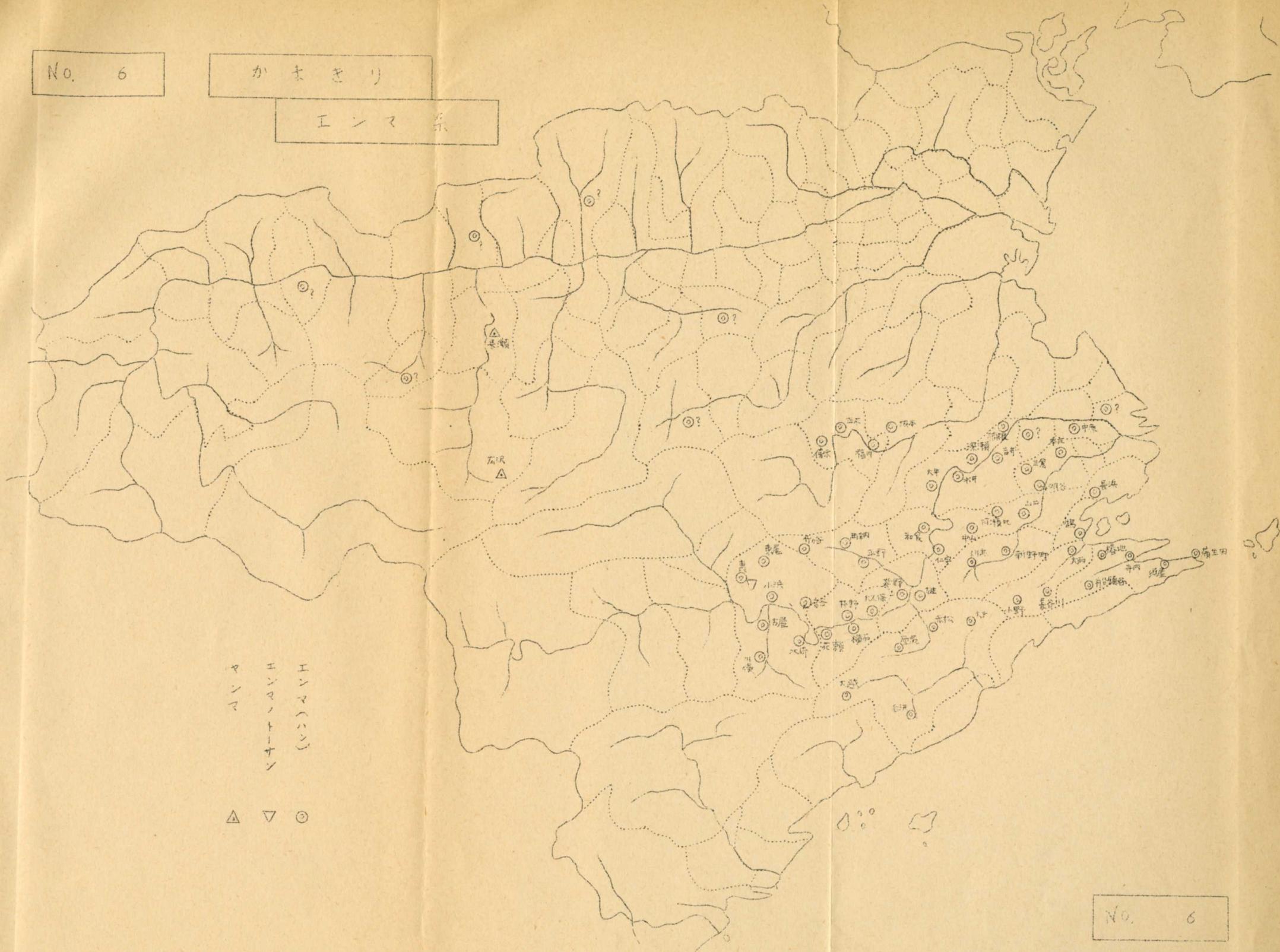




No. 6

かまきり

エンマ系



エンマ(ハン)  
 エンマノトサン  
 マンマ

△ ▽ ○

No. 6

No. 7

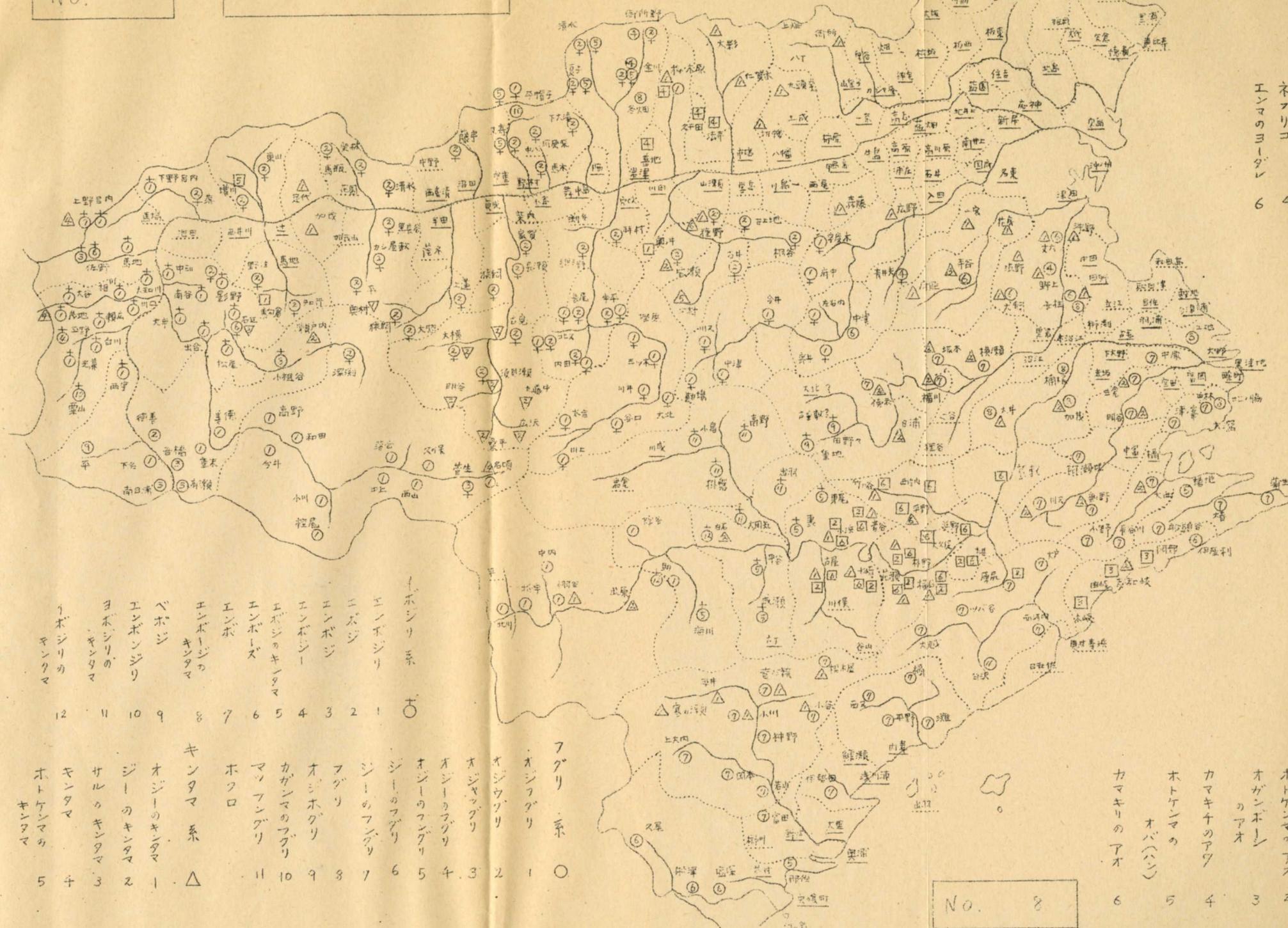
かまきり

ホトケ系



|         |   |
|---------|---|
| ホトケサン   | △ |
| ホトケムシ   | ○ |
| ホトケンマ   | △ |
| ホトケンバ   | ▽ |
| カマギリホトケ | ▽ |

No. 7



- イボシリ系
- エンボシリ
- エボジ
- エンボジ
- エンボシ
- エボシのキンタマ
- エンボーズ
- エンボ
- エンボージカ
- キンタマ
- ベボジ
- エンボンシリ
- ヨボシリ
- キンタマ
- イボシリ
- キンタマ

- キンタマ系
- オジのキンタマ
- オジのキンタマ
- サル
- キンタマ
- ホトケンマ
- キンタマ
- ヤマノカミ
- キンタマ

- フグリ系
- オジフグリ
- オジワフグリ
- オジマフグリ
- オジワフグリ
- オジのフグリ
- ジのフグリ
- フグリ
- オシホグリ
- カガンのフグリ
- マツフグリ
- ホフロ

- アワ系
- ホトケンマのアワ
- ホトケンマのアオ
- オガンのアオ
- カマキリのアオ
- ホトケンマの
- オバ(ン)
- カマキリのアオ

- その他
- ジのシリスケ
- エンマの
- オガマ
- イ系
- ホトケンマのイ
- オガンのイ
- カマキリの
- アワ系
- ホトケンマのアワ
- ホトケンマのアオ
- オガンのアオ
- カマキリのアオ
- ホトケンマの
- オバ(ン)
- カマキリのアオ

森  
道  
幸

22092

|        |
|--------|
| 4N-029 |
| (N3)   |
| Mo 45  |
| 徳島     |

徳島市  
森重幸

22092

1911